

人生と災害と文学の接点

岡本隆之祐

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■自分史と災害のかかわり

昭和17年に東京で、政治の世界に大きくかかわった父親の元で誕生した岡本隆之祐さんは戦中派。静岡県に疎開していた昭和19年に東南海地震、翌年に東京大空襲が起きている。昭和27年日本の主権回復により、父親の公職追放が解除され、小学校5年生のときとともに上京した。その後、早稲田大学法学部に進学したがこれからは工学だと考え直し、退学して武蔵工業大学（現東京都市大学）で建築を学んでいた昭和39年に新潟地震。大学では望月研究室、早稲田大学大学院では松井源吾研究室で建築構造を専修した。霞ヶ関ビルの竣工に湧いていた山下設計に入社した昭和43年に、十勝沖地震が起きる。この地震から岡本さんの災害地視察が始まった。

1901年に創立された母校の都立立川高等学校を誇りにする岡本さんは甲子園を目指して野球一筋だったが、この各界の名士を輩出している名門校に入学したのは東京タワーが完成した昭和33年です。

山下設計で構造設計部長になったのが35歳。順調に歩む岡本さんは、バグダッド放送局のコンサルが記憶に残っている。厚さ1mの鉄筋コンクリートに囲まれたシェルターの建設である。その後爆破されたのを知り、それがどうなったか今でも考える。昭和53年には宮城県沖地震が起きて視察。平成7年に取締役になると、同年に発生した阪神・淡路大震災の被害調査とその原因究明に努力した。平成11～18年までと長い期間のヨルダン観光開発プロジェクトなど、海外での設計監理の中心となっていく。さらに、4年後には常務取締役となり工事監理部総括部長も兼ねたから、岡本さんの仕事はエンジニアとしての実務よりマネジメントに重きは置かれていったが、トルコ大地震の調査、9.11で被害を受けたワールドトレードセンターの視察など、じっとしては入れなかった。ワー

ルドトレードセンターの構造設計をしたロバートソンが崩壊を見ていたことを聞き、構造的観点から崩壊に関して専門的ディスカッションをしたという。常任顧問に就任してから令和元年12月末の退職まで、カラチ自動車爆破テロ、新潟県中越沖地震、スマトラ島沖大地震、そして東日本大震災まで現地調査、被害調査の手は緩めなかったのです。

■教鞭から得た洞察力

長い山下設計での構造設計人生で、「あらゆる外力に対して建物を安全に設計する」ことが構造設計であると語る。外力とは、地震だけをいうのではない。自然災害の津波、火災、風、森林火災、集中豪雨、地球温暖化の影響などもある意味では人為的な災害ともいえる。災害は学術書からだけ学ぶものではないともいう岡本さん。文学作品には大災害が描かれているからそれを読み解くのだという。読破した文学書は、鴨長明の方丈記や樋口一葉の日記、谷崎潤一郎の細雪、芥川龍之介の羅生門など多岐に渡る。この根気には大学での長い非常勤講師歴が影響している。工学院大学、東京都市大学、実践女子大学などで30年というキャリアがあるのだ。大学の図書館で文学書を紐解き、災害にかかわる記述を見つけ出し「文学作品に取り上げられた大災害」として随想を発表しているくらいに研究を深めている。学術論文や学会発表、講演会の数は20を超えている。幅広いパワーには驚くばかりなのです。

岡本さんは、技術者であり教師だから若い構造家には具体的な指示をする。「将棋でいえば定石をたくさん覚えた人が強いのだ。工事現場を見て建物完成後に確認するのが大事だ」と。建築に携わる者にとっての基本だ。「見えない力を養って欲しい」とメッセージを送る。

